

心理学に対するイメージと実像

——「血液型と性格」の問題を例にして

今井久登

このたび、テキストボックス「つかむ」シリーズの一冊として、『心理学をつかむ』を刊行いたしました。心理学の分野からはシリーズ初となります。刊行にあたって、編集部から「心理学は面白い！」という意句を帯に頂戴しましたが、確かに心理学には多くのみなさんが関心を持っているようですし、大学の学部学科の中でも人気があるもののひとつです。

しかし、このような「心理学人気」の一方で、高校までの教育課程に心理学に相当する科目がないこともあり、心理学に関心を寄せながらもその実像

をほとんど存じない方が思いのほか多いという現状があります。これが、「心理学のことは何も知らないので、その実像を一から学んでみたい」というまっすぐなモチベーションにつながってくれば良いのですが、どうも事はそう単純ではないようです。

心理学のイメージと素朴心理学

心理学という学問の特徴は、その研究对象である心を、私たちひとりひとりがみな持っているということです。私たちは、自分自身の経験や心の動きにもとづいた、自分なりの心の理解を

持っています。いわば、私たちひとりひとりが「自前の心理学」を持っている、と言っても良いでしょう。これを素朴心理学と呼ぶことがあります。このため、学問としての心理学を学ぶとする前にすでに自分なりの心理学のイメージや期待を形作り、それを胸に心理学を学び始めることになります。残念なことは、そのような素朴な心理学のイメージや期待が、学問としての心理学の実像と必ずしも一致していない、ということなのです。

確証バイアス

認知心理学や社会心理学が明らかにした現象の一つに「確証バイアス」というものがあります。確証バイアスとは、私たちが「こうではないか」「こうだと良いな」というような仮説や期待を持ったとき、その仮説や期待に合う事例は認知されやすく記憶にも残りやすい反面、仮説や期待に合わない事例は、実際にはそのような反証事例をいくつも経験したり見聞きしたりしたとしても、認知されにくく記憶にも残りにくい、という偏りのことを指しています。つまり、私たちは、自分の考えや期待をサポートしてくれる確証事例ばかりを好んで認知し、思い出す傾向があるのです。

さて、心理学を学ぼうとする方がまず向かうところは、書店や図書館の心理学書のコーナーでしょう。そこに並

んでいるたくさんの本の中には、心理学の実像を正しく伝える良書ももちろん多いのですが、残念ながら、いささか疑問を感じるような本も少なくありません。そして、往々にしてそのような本は、心理学を学ぼうとする方が持っている期待やイメージに添えてくれるように感じられるのです。そのため、もともとの、必ずしも正しいとは限らない心理学のイメージや期待が増幅し、心理学の実像を表しているように思ってしまうのです。さらにそこへ確証バイアスがはたらくと、「自分のイメージには合わないけれど、心理学を正しく伝えている本」にはなかなか手が伸びなくなってしまいます。

こうして、「心理学はきつとこういう学問に違いない」「こうあって欲しい」という期待や思いこみが一人歩きしてしまい、それがついには「心理学はこういう学問なんだ」という誤った

理解にまで至ることが少なくありません。結果として、心理学を志して大学に入学されるかなりの方が、心理学に対して白紙の状態ではなく、自分なりの思い込みを抱いて入学されることとなります。

「血液型と性格」の 授業デモンストレーション

その典型的な例のひとつが「血液型と性格」の問題です。巷間、A B O式血液型と性格の関連を論じた本が溢れており、いかにも血液型と性格とが関係しているかのようにも思えますが、実は心理学では血液型と性格の問題はすでに決着がついており、「血液型と性格とは何ら関係がない」ということははっきりわかっています。

私の授業では、このことを実感して貰うために、簡単なデモンストレーションを行っています。まず、典型的な

血液型性格の本から抜き出してきた、四種類の血液型それぞれの性格特徴を列挙したプリントを配ります。例えば、A型のところには「目的指向性が強い」「行動に原則を持つ」、O型の欄には「周囲や相手に心を配る」「持続力がある」などといった具合です。そして、学生さんに、A型・O型・A B型・B型のどの性格特徴がいちばん自分にあてはまるかを考えてもらい、それぞれの人数を数えて表にするのです。

もしも血液型と性格の間に何らかの関係があるとしたら、自分の血液型のところに書かれている性格特徴がいちばん自分に当てはまることとなります。その場合、A型の血液型の方はA型の欄に、O型の方はO型の欄に、それぞれ書かれている性格特徴が自分がいちばん当てはまるという人が多いだろうと予測されます。A B型とB型に

ついても、もちろん同様です。

私は、このデモンストレーションをかれこれ二〇年近くやっていますが、いつも同じ結果が得られます。つまり、自分の血液型のところに書かれている性格特徴がいちばん自分に当てはまると思う人が多い、という結果になるのです。この結果だけみると、なるほど血液型と性格とはやはり関係があるようだ、ということになりそうです。

種あかし

しかし、そうではないのです。このプリントにはちょっとしたいたずらが仕掛けてあって、A型の血液型の欄には、実はO型の性格特徴とされているものが書かれていたのです。他の血液型も同様で、O型の欄にはA型、A B型の欄にはB型、B型の欄にはA B型の、それぞれの性格特徴とされるもの

が書かれていたのです。つまり、こっそり「O型の性格特徴」という見出しを交換しておいたのです。

従って、この授業デモンストレーションの結果は、血液型と性格の間には何の関係もなく、単に、「人は、自分の血液型の欄に書かれた性格特徴がいちばん自分に当てはまるように感じる」ということを示しているに過ぎないのです(ちなみに、授業でこの種あかしをすると、驚きで教室全体がどよめきます)。

病膏育に入る？

最近の気になる傾向

これだけであれば、授業のちょっとした趣向で終わりなのですが、二〇年近くこのデモンストレーションをやってきて、最近気になっていることがあります。ひとつは、二〇年の間、毎年毎回、「タイムリーな話題でおもしろ

かった」という感想が見られることで
す。二〇年間ずっとタイムリーという
ことはあり得ないですから、このよう
な感想は、この「血液型と性格」にま
つわる情報が、二〇年以上の長きにわ
たって、その時々でタイムリーだと感
じるほどに私たちのまわりに氾濫して
いることを表していると言えるでしょ
う。もうひとつ言えることは、学生さ
んたちはタイムリーな話題として捉え
ているけれども、実は決して一過性の
ものではなく、何十年ものあいだ継続
してずっと私たちのまわりに溢れ続け
ているということです。人間の個性や
パーソナリティに関わる誤った情報
が、これほど長期間、これほど大量に
溢れ続けていることは、私たちの心の
理解に看過できない影響を及ぼして
いるのではないかと憂慮されます。

もうひとつの気になる傾向は、それ
と関連しています。このプリントで

は、A型とO型、A B型とB型をそれ
ぞれ入れ替えていたわけですが、最近
になって、「プリントを配られた時に、
入れ替わっているんじゃないかなと気
づきました」という感想が散見される
ようになってきたのです。このような
感想は、昔は見られませんでした。こ
のことは、プリントのいたずらを見抜
くほど詳細な（しかし誤った）知識を
持った人が徐々に増えていることを示
唆しています。私たちの個性やパー
ソナリティは、「自分はこういう人間だ」
という自己意識によっても規定されて
ゆきます。「血液型と性格」に関する
誤った知識や先入観が根深くなってゆ
くと、ほんらいは豊かでバラエティに
溢れた個性やパーソナリティが、血液
型性格で論じられている四種類の性格
だけに集束し矮小化されてしまうので
はないか、という危惧さえ感じます。

心理学の実像を伝えるために

冒頭で書いたように、心理学を志す
方の多くは、心理学に対するご自分な
りのイメージや知識を持って心理学の
門を叩きます。「血液型と性格」の問
題も、そのひとつでしょう。心に対す
る関心が高まり心理学が人気ある学問
のひとつとなっていることは、個人的
にはとても嬉しいことですが、その副
作用として、心や心理学に対する誤っ
たイメージや先入観が強まっていると
したら、いささか困ったことだと思
います。「血液型と性格」の授業デモ
ンストレーションに見られる最近の傾
向は、その反映なのかもしれません。

これはもちろん、正しい知識や正し
い心理学の姿を十分に伝えてこなかっ
た心理学者の側の問題でもあります。
心理学教育の第一歩が、まったくの白
紙からではなく、ひとりひとりがす

に持っている「自前の心理学」を見直
すことから出発しなければならな
いという困難はありますが、徐々にであ
っても心理学のほんとうの姿を理解し、
ほんとうのおもしろさを伝えてゆく努
力は惜しむことはできません。今回刊
行させていただいた『心理学をつか
む』は、少しでもそのお役に立てばと
の思いで執筆いたしました。それが僅
かであっても奏功してくればと願っ
ているところです。

いまい・ひさこ

＝東京女子大学現代教養学部教授

今井久登・平林秀美・
工藤恵理子・石屋琢磨 〔著〕
『心理学をつかむ』有斐閣刊
A5判、三六〇頁、定価一五二〇円（税別）
●好評発売中